

教授行動に影響を及ぼす二要因についての考察(1)

—机間巡視において獲得される情報と児童特性の分析—

渡部 洋一郎*
(平成8年10月31日受理)

要 旨

従来、行われてきた授業分析は、主として教師と子どもの相互交渉を文字化した、いわゆる T-C 型の授業記録によってなされることがほとんどであった。そこには、ある授業時間中の言語情報のやりとりが記録され、児童がその中でどのような発言をしたのか、また、教師はそれに対していかなる対応をしたのかデータとして蓄積されている。しかし、こういった文字記録を検討するだけでは、発話として表れない言動や行動の詳細、例えば、机間巡視中・グループ別学習といった際の両者間のやりとりや、ある行動を教師がとったときの心理的背景・意図までは把握しきれない。

本研究の目的は、こういった課題に対する一つの試みとして刺激回想記録を用いて実際の授業を分析し、T-C 型の授業記録には表れにくい教師の言動や、その背景にある教師の隠れた意図を明らかにすることにある。そのため、まず本稿では教師の意思決定という観点からこれまで行われてきた諸研究を概観し、そこにみられる問題点についての整理を行う。その上で、机間巡視において獲得される情報と教師が把握する児童特性という2つの要因に関して、実際の事例を分析する際の課題と方法論について述べる。

KEY WORDS

Immediate Judgment 即時的判断 Individual Attention as means 机間巡視
Child Characteristics 教師が把握する児童特性
Teacher Decision-Making while Conducting Classroom Instruction
授業実施過程における教師の意思決定

1. 問 題

教師は、通常、教授目標、学習者、教授内容及び授業展開に関する教授方略や実際の学習場面を想定した学習活動及び教材文の解釈に基づく具体的な教授方策をあらかじめ計画し、それに基づき、最初にきっかけを与える行動を実施する。そして、それに対してなされる学習者からの何らかの反応・応答を Cue (手掛り) として知覚し、いくつかの情報を収集しながらそれを分析的に解釈し、どのような対応をしたらよいかの意思決定を行い対応行動を選択・決定するのである。

* 言語系教育講座

Snow, R. E. (1972)によれば、授業過程における教師の意思決定は、授業計画と授業実態(現実の子どもの反応)とのズレの認知とそれにともなう記憶の中からの代替策の探索の連続であるという。Shavelson, R. J. (1973)は、個々の教授スキルを統合するところの意思決定こそ教授に関する最も基本的なスキルであるとし、他の同僚から有能な教師を識別するものは、高次の発問をする能力ではなくて、このような発問をどのような授業場面であるのかといった時期を決定する能力だと主張した。また、吉崎(1986)は授業実施段階での意思決定を「相互作用的決定」と呼び、その特徴を柔らかさ、おおらかさといった教師の心的状態に支えられながら、授業場面における子どもの反応を臨機応変に授業の中に取り入れることを重視する点に見られると指摘している。

実践過程におけるこれらの意思決定研究は、いずれも、子どもの理解や意欲の状態を的確に推論する能力、どのような授業場面において授業案の見切りを行うのかを判断する能力、そしてそのような場面においてどのような教授行動が最も適切なのかを見極める能力を持つことが授業者としての教師には重要であることを示唆している。授業中の教師のこうした臨機の即時的判断は、これまでおもに予想外の応答場面において最も典型的に現われるとされてきた。

例えば、Shavelson, R. J. (1983)は、教師が予想外の出来事に遭遇するきっかけはほとんどが生徒の予想外の応答にあること、その際多くは教師のルーチンの教授行動を採用することなどを明らかにしている。また、吉崎(1983)は小学校6年生の算数の授業を対象に、教師の経験や性別によって授業のポイント場面での意思決定にはどのような違いがあるのかを検討している。調査に用いられた2つの場面は、次のような特徴を持っている。場面Aは、授業者が予想していたよりも早い時期に、トップクラスの成績の児童より本時のねらいに直結した応答が出た場面であり、また場面Bは、当然正答が出ると期待していたのに、成績上位の児童より思わぬ誤答が出た場面である。この場面のVTRを、被調査者(各地の小学校教師245名)に見せ、「あなただったら、つぎにどのような行動をとるか」という設問を提示し、あわせてその理由を選択法でたずねた。結果は教職経験、題材経験⁹⁾等により分析され、特徴として若手教師は、予想以上に早い時期に本時のねらいに直結した応答が出た授業場面において、以前の授業内容にもどろうとする慎重な傾向があり、一方、中堅・ベテラン教師は、とどまるか、先に進むようにする大胆な傾向がある。また予想以上に早い時期に本時のねらいに直結した応答が出た授業場面において、題材経験の少ない教師は、「もどる」を選択する機会が多く、題材経験の多い教師は、「とどまる」や「すすむ」といった意思決定をする傾向が見られるということが明らかになった。

一方、樋口(1994)・渡部(1994)らは、小学校の国語の授業における予想外応答場面に注目し、当該場面における教師の意思決定について、教師の期待水準と対応行動という2つの観点からカテゴリ分析を行い、典型的な意思決定場面について質的な解釈を試みた。主な結果は、次のとおりである。まず、児童の予想外反応は、教師にとって圧倒的に期待以下である場合が多く、予想外反応への教師の対応策は何らかの修正行動が多いことである。その際、教師は児童の応答を自らの解釈に近づけようとする意思決定が働くため、答えた児童に対してさらに発問したり、児童の意見を修正、あるいは否定するような計画の変更を行う。それとともに、児童の発言する機会を重視し、その意見を大事にしようとする意思決定が働くこともあり、その場合には指名を継続する傾向がある。対して、児童の予想外反応が教師にとって期待以上の場合には、期待水準の程度によって、解釈を深めそれを発展させる場合と同意や応諾をするにと

どめ大きく計画を変更しない場合とに別れる傾向が認められた。また、児童の反応が期待以下の場合でも、熟練教師は、具体的な示唆を与え複数の方略を巧みに組み合わせながらその場面をうまくまとめられるのに対して、新任教師の場合は、授業技術が未熟なため教師の意図が児童に理解されにくく、実際に使用している方略も認知的に低次のもののみであった。

さて、以上に見られる一連の意思決定研究は、教師が児童生徒との相互作用の中でどのように思考し、判断し、決定し、行動するかという問題に光を当て、予想外場面の教師の思考の諸要因と教師の対応的な教授行動の基礎的関連を事例分析的に明らかにし得たが、同時に次のような問題も抱えていると思われる。第1は、研究方法としての刺激回想法の用い方が授業全体の展開に及んでいない点である。先行研究の多くは、実施された授業の中からあらかじめ重要ないくつかの場面を選び出し、その場面で研究者の意図的な質問を用意して授業者にインタビューし、その回想を記録するという手法をとっている (Shavelson, R. J. 1983)²⁾。また、吉崎 (1983) の研究法にしても、ある教師の授業の録画された記録を授業者以外の教師が視聴し、ポイントとなる場面で観察者がどのような意思決定を行ったのかを調査したもので、授業者本人が授業後に自分の授業全体を視聴し、授業中にどのような意思決定を行っていたのかを回想した記録ではない。

こうした問題点をふまえ、樋口 (1994)・渡部 (1994) は、授業中の教師の思考と判断をできるだけ拾えるように、授業中の教師の思考内容を全体にわたって可能な限り自由に語ってもらい、その記録をデータとして活用するように取り計らった。ただし、これらの研究では、予想外場面を抽出するにあたって、教師の発問—児童の応答—教師の対応行動というサイクルに着目し、「指導案と授業記録とを対照し、学習指導案では予定されていない(学習指導案にないか、もしくは学習指導案と異なる)教師の発問や教師・児童の行動を抜き出す」および「刺激回想記録の中で、予定と異なる行動をとった、あるいは予想外であったと教師が明言している部分を抜き出し、これに該当する部分を授業記録から抜き出す」という手続きを経たため、いずれも授業記録にデータとしてあらわれない非言語的の行為とそれに関する刺激回想記録は考察の対象からもれてしまうという問題があった。

教師と子どもの相互交渉を文字化した、いわゆる T-C 型の授業記録には、ある時間中の言語情報のやりとりが記録され、児童がその中でどのような発言をしたのか、また、教師はそれに対していかなる対応をしたのがデータとして蓄積されている。しかも、授業記録として表れる言語情報はクラス全体に共有されているものであり、一斉授業の際にやりとりされた発語行為の記述である。だが、こういった文字記録とそれに対応する部分の刺激回想記録を検討するだけでは発話として表れない言動や行動の詳細、例えば、机間巡視中・グループ別学習といった際の両者間のやりとりや、ある行動を教師がとったときの心理的背景・意図までは把握しきれない。しかしながら、個別指導や机間巡視をしている際の対個人の発語行為・非言語的な行動場面に関わる刺激回想記録には、意思決定の手掛りとなる情報がいくつも含まれている。しかも、個別指導や机間巡視の際に獲得した情報は、対応行動の選択・決定や授業形態の変更、児童指名の順序決定の大きな要因になっているのである。本研究の第1の目標は、このような非言語的行動場面において、教師はどのような情報を得、いかなる意思決定を行っているのか、また、その情報は教授行動やその後の授業展開にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることにある。

ところで、机間巡視中に教師が獲得した情報が意思決定にどのような影響を及ぼすかについ

ては、すでに助川（1995）の研究がある。そこでは、小学校の2つの授業の考察から「教師が机間巡視中に獲得した情報は、教材に対して児童が示した理解や解釈に関する情報や、作業中の児童の様子に関するものが多いこと」「そこで得られた情報に基づく教授行動としては、指導方法や授業形態を変更したり、ある児童を授業中の特定の場面で意図的に指名したりする場合がある」という2点が明らかにされているが、こういった情報を得た時にどのような行動をとることが多いのかといった両者の具体的な相関関係については言及されていない。

また、近藤（1988）によれば、教師が机間巡視でよく目をとめる生徒とは、①教師にとって気になる生徒、②授業でほとんど発言しない生徒、③おとなしく目立たない生徒、であるという。授業過程における教師の生徒理解の状態を分析した下地・吉崎（1990）らも、机間巡視という方法を用いて、教師がより多くの手掛りを得ようとする生徒は、ほとんどの学習場面で「学力の下位」または「学習態度の悪い」生徒であるという結論を導き出している。これらの研究結果は、授業実施過程において教師は子どものことを考えながら、次の授業展開について意思決定することが一般的な姿であるにせよ、個別指導あるいは生徒理解という机間巡視のような場面においては、どの子どもにも必ずしも均一に目を配っているわけではないことを示している。だとするならば、教師が机間巡視中に獲得した情報がその後の意思決定にどのような影響を及ぼすかを考える際に、そこに教師が把握する児童特性という要因がどのように関係してくるのかを検討することは重要な意味を持つと思われる。

以上のような点に鑑み、本研究では机間巡視中・グループ別学習といった非言語的な行動場面において、教師はどのような情報を得、いかなる意思決定を行っているのか、また、その情報は教授行動やその後の授業展開にどのような影響を及ぼしているのか、両者の相関関係を明らかにすることを目的とする。その際、教師が把握する児童特性という要因が教師の意思決定にどう影響するのかを検討する。子どもの特性を考慮した授業分析を行うことは、教師と児童のコミュニケーションをただ全体的に分析した場合とは違った知見を導き出すはずであり、それはまた、「子どもの個人差に対応する授業」を考えていく際の基礎的な資料にもなり得ると考えられる。

2. 目 的

本研究の目的は、T-C型の授業記録中に発話として表れない非言語的な行動場面において、教師はどのような情報を得、いかなる意思決定を行っているのか、また、その情報は教授行動やその後の授業展開にどのような影響を及ぼしているのか、両者の相関関係を明らかにすることにある。それとともに、教師が把握する児童特性という要因が意思決定の際、どう影響するのかも検討する。そのため、ここでは以下の3点を課題として設定する。

- (1) 教師が授業中に机間巡視やグループ別学習等を設ける頻度、および収集している情報の内容を明らかにする。
- (2) 収集した情報の内容および教師が把握する児童特性と教授行動との関係について、その特徴を考察する。
- (3) 収集した情報の内容および教師が把握する児童特性が、授業における意思決定にどのように影響を及ぼしているのかを明らかにし、その特徴を事例に即して考察する。

3. 方 法

分析の対象となったのは次の8つの授業である(表1参照)。授業1～5は平成3年に茨城県つくば市の公立小学校において、授業6～7は平成5年に茨城県稲敷郡阿見町の公立小学校において、授業8は平成6年に東京都文京区内の国立大附属小学校においてそれぞれ行われた。(なお、表中の経験年数は、各教師が授業実施時に有していた教職経験年数を表している。)

本研究では、これらの授業に対して次のような分析方法を採用し考察を行う。

- (1) 各授業の学習指導案と教材文を収集し、授業時の様子をVTRにおさめたものを基に授業記録(録画した記録を基に、授業中の教師と児童のやりとりを文字化したもの)を作成する。
- (2) Stimulated Recall Methodに基づき、授業後に録画した授業のビデオを授業者に見せて、その時に考えていたことを自由に述べてもらい、それを録音し、後に文字化して刺激回想記録を作成する³⁾。
- (3) 授業記録中の、教師と児童のやりとりが文字化されていない部分とそれに対する刺激回想記録を抽出・整理し、各授業ごとの頻度と当該の授業場面において教師が収集している情報内容を把握した上で、分類内容ごとの全体的な傾向を明らかにする。
- (4) 収集した情報内容を基に教師が意思決定を行う際、そこに教師が把握する児童特性という要因はどう関係しているのかを、当該場面に関わる刺激回想記録より確認する。
- (5) (3)および(4)で得られた結果と教師が実際に選択・実行した教授行動との関連について、特徴的な傾向を明らかにする。
- (6) 教師が獲得した情報の内容と児童特性、および教授行動・授業展開の関係を、典型的な事例を分析することによって解明する。

*本稿で設定した課題と方法に基づき、次号で分析の結果および考察、典型的場面の事例分析、成果と課題について言及する。

表1 授業一覧

授業	学年	教科	教材・授業内容	授業実施時期	授業者	経験年数
1	3年	国語	つ り 橋 わ た れ	平成3年6月	Y. A. 教諭(女)	11年
2	1年	国語	く じ ら ぐ も	平成3年10月	S. E. 教諭(女)	16年
3	6年	国語	や ま な し	平成3年11月	T. Y. 教諭(男)	2年
4	5年	国語	大 造 じ い さ ん と ガ ン	平成3年11月	Y. T. 教諭(女)	10年
5	6年	国語	や ま な し	平成3年11月	S. Y. 教諭(女)	12年
6	5年	国語	ぼくの家だけあかりがともらない	平成5年12月	Y. Y. 教諭(女)	9年
7	4年	算数	面 積	平成5年12月	K. T. 教諭(男)	12年
8	5年	理科	て こ	平成6年11月	T. K. 教諭(男)	13年

—〔注〕—

- 1) 同じ教材を同じ学年の児童に教えた経験という意味で、当該の授業に対しては直接的・特殊な経験であるという側面を持つ。
- 2) Clark, C. M. & Peterson, P. L. (1986), Barko, H., Livingston, C. & Shavelson, R. J. (1990) らによる教師の意思決定に関する実証的な研究も、ほぼ同様の手法を用いている。
- 3) Stimulated Recall Method を実施する際、研究者1～2名が授業者とともに録画を視聴したが、研究者は授業者の回想にできるだけ介入しないように努めた。

引用文献

- Barko, H., Livingston, C. & Shavelson, R. J. (1990) Teachers' Thinking About Instruction. *Remedial and Special Education* 11, Issue. 6, 40-49.
- Clark, C. M. & Peterson, P. L. (1986) Teachers' Thought Processes. In M. Wittrock (Ed.), *Handbook of Research on Teaching, Third Edition*, Macmillan, 255-296.
- 樋口直宏 (1994) 「授業中の児童の予想外応答と教師の対応行動の関係」『授業における教師の意思決定に関する実証的研究』(その3), 筑波大学教育学系研究促進費研究 13-23.
- 近藤久史 (1988) 「机間巡視・個人指導」『教職研修総合特集 教育技術読本』No. 45 教育開発研究所 274-279.
- Shavelson, R. J. (1973) What is the basic teaching skill? *Journal of Teacher Education*, 24, 141-150.
- Shavelson, R. J. (1983) Review of research on teachers' pedagogical judgements, plans, and decisions. *The Elementary School Journal*, 83(4), 392-413.
- 下地芳文・吉崎静夫 (1990) 「授業過程における教師の生徒理解に関する研究」『日本教育工学雑誌』Vol. 14 No. 1, 43-53.
- Snow, R. E. (1972) A model teacher training system : an overview. R & D Memorandum No. 92, Stanford University, School of Education, Center for R & D in Teaching.
- 助川晃洋 (1995) 「机間巡視において教師が獲得する情報が意思決定に与える影響」『授業における教師の意思決定に関する実証的研究』(その4), 筑波大学教育学系研究促進費研究 55-64.
- 吉崎静夫 (1983) 「授業実施過程における教師の意思決定」『日本教育工学雑誌』Vol. 8 No. 2, 61-70.
- 吉崎静夫 (1986) 「教師の意思決定と授業行動との関係 (1)」『鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編)』第1巻, 23-39.
- 渡部洋一郎 (1994) 「予想外応答場面における新任教師と熟練教師の対応行動の比較」『授業における教師の意思決定に関する実証的研究』(その3), 筑波大学教育学系研究促進費研究 24-41.

Some Observations on Two Factors that
Influence Instructional Activities (1)
—An Analysis of Information Obtained through Individual
Attention and Child Characteristics—

Yoichiro WATANABE*

ABSTRACT

It is now common that classroom instructions are analyzed based on the so-called T-C type instructional records in which interactions between children and their teachers are expressed in words. The records contain data showing how they interacted through language, that is, what children said and how teachers responded to it. Such an instructional analysis, however, cannot capture details of their activities that are beyond words. We, thus, cannot recognize children's activities that teachers notice through observing individuals or group work, or what teachers' intention/psychological background to give a particular course of instruction is.

The purpose of the present study is to analyze classroom instructions based on stimulus recall records and reveal teachers' activities and intentions behind them that are hardly captured by means of the T-C type instructional records. First of all, we will review previous studies from the viewpoint of teachers' decision-making and point out some problems. Furthermore, focusing on the two factors of information that teachers obtain through individual attention and child characteristics, we will present a methodology which will clarify some problems and enhance analysis of cases.

* Division of Languages: Department of Japanese Language